

資 料

新居郡加茂村大保子谷（現西条市藤之石）で捕獲されたニホンカモシカ *Capricornis crispus*

稲葉 正和 *

The Japanese serow, *Capricornis crispus*, caught at Oofugo valley, Kamo village (now Saijo city Fujinoishi) in Nii-gun
INABA Masakazu

Abstract : It is confirmed that Japanese serow, *Capricornis crispus*, were inhabited in the Mountain Ishizuchi in Ehime prefecture. Until now, Ehime's only recorded finding of the Japanese serow, *Capricornis crispus*, was shortly after World War II in Takataru, Ishizuchi village (now Saijo city-Komatsu town-Ishizuchi). However, during a recent specimen survey of public schools in Ehime prefecture, I discovered a specimen of Japanese serow, *Capricornis crispus*, which had been caught in Kamo village (now Saijo city-Fujinoishi). In this paper, I will report on the past habitat status of the Japanese serow, *Capricornis crispus*, in Ehime prefecture based on the specimen records I discovered.

キーワード : ニホンカモシカ, 愛媛県内 2 例目の標本記録, 愛媛県のニホンカモシカの過去の生息地

Key words : Japanese serow, *Capricornis crispus*, The Ehime's second specimen record of Japanese serow, *Capricornis crispus*, The past habitat status of Japanese serow, *Capricornis crispus*, in Ehime prefecture

はじめに

ニホンカモシカ *Capricornis crispus*（以下カモシカ）は愛媛県内において石鎚山系に分布していたことが確認されている。しかし、愛媛県産のカモシカの標本は戦後すぐに高瀑方面で捕獲された個体の毛皮しか確認されていなかった（宮本，2014）。筆者は、愛媛県内の公立学校に収蔵されている様々な標本を調査し、標本の保存状態を確認するとともに、発見した標本を可能な限り本館に移管する活動を行っている。愛媛県立西条高等学校の標本調査において、新居郡加茂村大保子谷で捕獲されたカモシカの毛皮を新たに確認した。これは愛媛県内において情報の少ない本種の貴重な標本に基づく記録であるとともに、本種の標本として愛媛県においてもっとも古い時代に得られたものと推定されたため、ここに報告する。あわせて、過去の愛媛県におけるカモシカの生息地の記録について、発見した標本と文献調査および聞き取り調査の結果をもとに報告する。

カモシカについて

カモシカは、ウシ科ヤギ亜科カモシカ属に属する日

本の固有種で本州、四国、九州に分布している（三浦，1994）。古くはクラシシ、ニクなどとよばれており、山間部に暮らす人々の貴重なタンパク源であった（森川，1975）。カモシカの個体数は、良質な毛皮と肉を求めた乱獲によって明治期以降に大きく減少した。大正 11 年（1922 年）の内務省地理課の調査資料では、すでに中国地方と北九州地方の個体群が確認されておらず、現在の分布の地理的パターンが確立されていたことがわかっている（常田，1995）。国はカモシカの保護を図るため、大正 14 年（1925 年）に狩猟法によってカモシカを狩猟獣から除外した。また、本種は原始的な形態と社会構造をもつ貴重な種であることが認知され、昭和 9 年（1934 年）には国指定の天然記念物に指定された。しかし、その後も密猟の影響でカモシカの個体数は回復せず、幻の動物とよばれるまでにいたった。そのため、国は昭和 30 年（1955 年）にカモシカを特別天然記念物に指定し、より積極的な保護に乗りだした（花井，1995）。昭和 34 年（1959 年）には全国規模の密猟取締りが行われ、カモシカの個体数の主要な減少要因であった狩猟圧が取り除かれ、カモシカの個体数は順調に回復し始めた。一方、個体数の増加に伴い農林業への食害という問題が引き起こされるようになった。そのため、昭和 54 年（1979 年）

* 愛媛県総合科学博物館 学芸課 自然研究グループ
Curatorial Division, Ehime Prefectural Science Museum

に文化・環境・林野の3庁間で保護地域の設定と個体数調整を含む食害防除対策が打ち出された。現在、四国と九州を除く全国13ヶ所に保護地域が設定され、個体数の維持管理が図られている（常田，1995）。

四国におけるカモシカの現状

カモシカの個体数は、全国的には順調に回復しているが、もともとの個体数が少なかった四国、九州の個体群では個体数の回復は十分に進んでおらず、両地方のカモシカは絶滅の恐れのある地域個体群（LP）に指定されている（環境省，2017）。平成22・23年度に行われた第4回四国山地カモシカ特別調査では、四国地方のカモシカの個体数は1,602頭（±312頭）と推定されており、前回の調査時の個体数2,685頭と比べると減少傾向が見られる（金城ほか，2012）。また、かつては剣山系の中心部に高い生息密度がみられたが、中心部の生息密度は急激に減少し、ドーナツ化現象が確認されている。これらの現象は、近年個体数が急激に増加したシカとの競合の結果と考えられている（金城，2012a）。今後は、カモシカの保護に向けて、拡大している生息域を把握するためにモニタリングポストを増設すること、地域住民からの情報提供を受けるためのネットワークづくり、生息域の植生調査とその保全活動など多面的な取組を進めていく必要性が提唱されている（金城ほか，2012）。

愛媛県におけるカモシカの記録

愛媛県におけるカモシカの記録については、八木繁一氏の著作「愛媛県動物誌」の中で、新居郡加茂村川来須（現西条市藤之石）と久万山地方に古くから生息しており、その地方では「にく」とよばれていると報告されている（八木，1931）。この本の見開き部分には、大きさや体色の特徴などから四国産と考えられるカモシカの剥製の写真が掲載されている（写真1）。八木繁一氏は、大正11年（1922年）から昭和16年（1941年）まで愛媛県師範学校教諭として奉職されており（愛媛県教育委員会，2016）、愛媛県師範学校には県内の様々な資料を集めた郷土館が設置されていた（作道ほか，1984）。その郷土館が発行した目録の中に、郷土館には新居郡加茂村産のカモシカの剥製が収蔵されていたことが記録されている（愛媛県師範学校郷土館，1934）。そのため、この写真は、愛媛県師範学校の郷土館に収蔵されていたカモシカの剥製である可能性が高いと考えられる。ただし、この剥製の所在については、現在確認できない。愛媛県師範学校は昭和20年7月26日の空襲で焼失したことから（作道ほか，1984）、その際にカモシカの剥製も焼失したものと考えられる。

新居郡地方におけるその他のカモシカの記録については、大正12年（1923年）発刊の「愛媛縣新居郡誌」に、多からずとも「にく」が生息するとの記述がある（愛媛縣新居郡役所，1923）。昭和10年（1935年）発刊の「石鎚連峯と面河溪」の中では、カモシカの生息地として、石鎚山地の西冠方面（現西条市小松町石鎚）、瓶ヶ森の大ふご谷（現西条市藤之石）、笹ヶ峰の沓掛（現西条市藤之石）、黒森の断崖（現西条市藤之石）、土佐の椿山（現高知県吾川郡仁淀川町）、寺川（現高知県吾川郡いの町）と具体的な地名が記されている（秋山，1935）。ただし、この本が発刊された昭和10年の時点でも、乱獲のためにカモシカの個体数は大幅に減少しており、カモシカは絶滅の危機に瀕していると記されている（秋山，1935）。

東予地方では、カモシカの生息を示す地名も確認される。新居郡より東に10kmほど進んだ赤石山系の二ツ岳南麓には肉淵や肉淵谷という地名が現存している。肉淵の地名の由来ははっきりとわかっていないが、二ツ岳に昔カモシカがたくさん住んでいたという言い伝えや昔はカモシカを年に1頭から2頭は捕獲していたということから現在の地名になったと推察されている（別子山村史編纂委員会，1981；安森，1996）。新居郡方面でのカモシカの最後の捕獲記録については、昭和19年（1944年）伊予富士（現西条市藤之石）の基安鉾山にて現場監督をしていた伊藤綱治郎氏がカモシカを捕獲した記録が最後のものになると考えられる（伊藤，1980）。

久万山地方については、カモシカの毛皮や肉を利用してしたことやカモシカの角を釣りの擬餌としていたとの記録があり（中川，1980）、かつてこの地域で多くのカモシカが生息していたことがうかがえる。東予地方で見られたカモシカの生息を示す地名は、久万山地方でも確認される。久万高原町若山の猿飛谷には、狩猟者がカモシカを追い込んで捕獲していた岩場があり、地元の人はその岩場をニクワタチとよんでいた（矢野真志私信）。ニクワタチとは、「カモシカ立つ」というような意味合いである（矢野真志私信）。カモシカをイヌで追いまわすと人も犬も近寄れない断崖に逃げ込んでじっとこちらを見るという狩猟者の体験談が記録されているが（秋山，1935）、そのような様子をさしてニクワタチとよんでいたと考えられる。過去の動物の生息を示す地名の例としては、カワウソの生息を示す瀬越が知られているが（愛媛県教育委員会，1964）、肉淵やニクワタチもそれにあたると思われる。久万山地方の最後の個体の捕獲記録については明らかではない。カモシカが天然記念物に指定された後も密猟が続いていたようであるが、当然ながら捕獲記録が報告されることはないためである。昭和27年（1952年）発刊の「石鎚連峰と面河溪調査書」の中では、昭和22年（1947年）の冬にカモシカが目撃されたとの情報が報告されている（愛媛県土木部都市計画

課, 1952). しかし, その後の記録については不明である.

愛媛県の最後の捕獲記録は, 西ノ冠岳にほど近い高瀑方面で戦後すぐに捕獲されたものとされている(森川, 1975; 中山, 1980; 宮本, 2014). その後は, 面河村の金山谷から丸滝山にかけての地域(現久万高原町若山)や丹原町の夫婦滝(現西条市丹原町明河)付近で糞や足跡を見かけたという住民からの聞き取り情報が報告されている(森川, 1979). しかし, カモシカの生息を示す確実な記録は確認されておらず, 愛媛県のレッドデータブックにおいては愛媛県内の個体群は絶滅したと判定されている(宮本, 2014).

発見されたカモシカの標本について

筆者は, 愛媛県立西条高等学校にて新居郡加茂村大保子谷(現西条市藤之石)で高橋吉造氏に捕獲されたカモシカの毛皮を発見した(写真2, 写真3, 写真4). 採集者である高橋吉造氏の住所は加茂村字千石(現西条市千石)とラベルに記録されていたので, 千石に赴き現地の住民に聞き取り調査を行った. その結果, 高橋吉造氏は, 笹ヶ峰にある丸山荘を立ち上げられた高橋吉治郎氏に関係する人物ではないかとする情報が得られた(山内計也私信). そこで, 高橋吉治郎氏の孫にあたる伊藤節子氏を訪ね, 高橋吉造氏について御話を伺ったが, 高橋家の戸籍に吉造という人物は記録されていなかった. その後, 千石に古くから住まれている80代から90代の住民の方にも聞き取り調査を行ったが, 高橋吉造氏を記憶されている方はおられず, この人物の詳細については不明である. おそらく明治時代から大正時代にかけて千石で生活されていた人物であると考えられる. 新居郡加茂村は明治22年(1889年)から昭和31年(1956年)まで存在していた行政区であることから(「角川日本地名大辞典」編纂委員会, 1981), 今回発見されたカモシカの毛皮は高橋吉造氏が明治中期から大正時代にかけての間に捕獲したものであると考えられる. そのため, 県内では最も古いカモシカの捕獲記録であり, 様々な文献に示されていた新居郡のカモシカの生息記録を裏付ける標本であると考えられる.

今回発見されたカモシカの毛皮が愛媛県立西条高等学校にて発見された経緯については, 次のように推察される. 千石出身の高橋吉治郎氏が建設した丸山荘は, 近隣の学校が行っていた学校登山でよく利用されていた. そのため, 高橋吉治郎氏は学校関係者や西条中学(現愛媛県立西条高等学校)の登山部の生徒との親交が深かった(安森, 1996). また, 明治12年(1879年)生まれの高橋吉治郎氏は, 猟を趣味としており, ウサギ猟を行ったり, 猟でとらえたウサギのなめし革の作製を行ったりしていた(伊藤節子私信). そのため, 同じ地区に住む高

橋吉造氏とは猟師仲間として親交があったと考えられる. このような縁で高橋吉造氏が捕獲したカモシカの毛皮を, 高橋吉治郎氏が西条中学に寄贈したのではないかと考えられる. なお, 高橋吉治郎氏も昭和初期に黒森山(現西条市藤之石)付近で3頭のカモシカを打ち留めたとの記録も残っている(安森, 1996). これも文献調査の記録を裏付ける記録として興味深い.

四国内には本州で捕獲されたカモシカの毛皮もかなり多く流入しており, 今回発見された毛皮も本州産のものである可能性は否定できない. 本州産のカモシカは体重が35kg~40kgで比較的大型であるのに対し, 四国産のカモシカは体重が30kgをこえない小型の個体が多く, 本州産のものと比較して体色が黒い個体が多いと報告されている(中西, 1995). そこで, 今回発見された毛皮の全長を計測した. 全長は104cmであり, 四国産の平均頭胴長である $100.6 \pm 2.1\text{cm}$ より若干大きいものの, 白山の $114.5 \pm 1.0\text{cm}$ や伊吹・比良山産地の $105.3 \pm 0.9\text{cm}$ よりは小型であった(金城, 2012b). さらに, 四国のカモシカの形態や生態に詳しい動物写真家の中西安男氏に毛皮の鑑定を依頼した. その結果, 発見された毛皮は刺毛の大部分が失われているため, 白っぽい体色に見えるが, 残っている刺毛の体色や体全体の大きさの印象から四国産のカモシカの可能性が高いと鑑定された(中西安男私信). この毛皮は, 愛媛県総合科学博物館哺乳類標本(EPSM-MA-1327)として登録, 保管している.

中西(1998)は, 本州と四国のカモシカの遺伝子レベルでの変異を調べるため, カモシカのミトコンドリアDNAのチトクロームb遺伝子を解析し, 本州の個体群と四国の個体群の間では, 最大で3ヶ所, 最小で2ヶ所の塩基配列の置換があることを確認している. 今後, 本館に収蔵している高瀑産のカモシカの毛皮と今回収蔵した大保子谷産のカモシカの毛皮のDNAの分析を行い, これらの毛皮が四国産のカモシカであることを確認する必要がある.

おわりに

新居郡加茂村大保子谷産のカモシカの毛皮を発見したことをきっかけに, 愛媛県内におけるカモシカの分布記録を調査した. 文献調査の結果, カモシカは石鎚山系を中心に東予地方の山岳地帯に広く分布していたことが確認された. また, 赤石山系では肉淵, 久万山地方ではニクワタチとよばれる地名が存在し, カモシカが山間部の住民の貴重なタンパク源として利用されていたこともうかがえた. しかし, 愛媛県内に現存する愛媛県産のカモシカの標本は, 今回発見された毛皮を含め2点のみである. カモシカの毛皮は, 山間部の住民の腰あてとしてよく利用されていた(清水, 1961). また, 聞き取り調査に

において、カモシカの毛皮を見たことがあるとの住民の証言も得られている（矢野真志私信）。山間部の古い民家には愛媛県産のカモシカの毛皮が保存されている可能性もあるため、今後も調査を継続することで、愛媛県産のカモシカの標本の発見に努めていく必要がある。

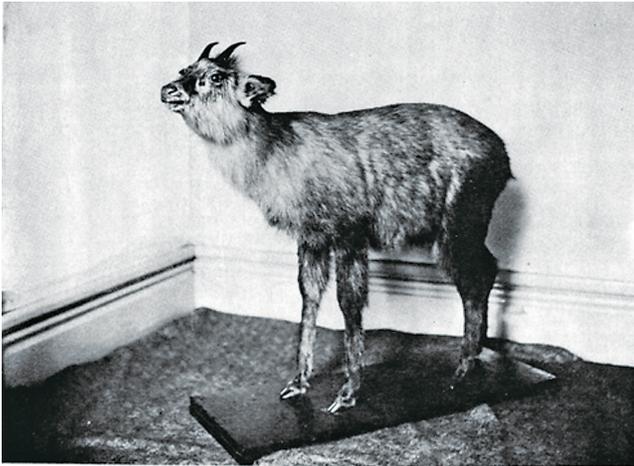
謝 辞

本調査に快く御協力いただいた愛媛県立西条高等学校教諭田村謙悟氏、標本の寄贈を許可していただいた愛媛県立西条高等学校校長（現愛媛県立松山東高等学校校長）石崎学氏、聞き取り調査に御協力いただいた山内計也氏、伊藤節子氏、面河山岳博物館学芸員矢野真志氏、英文要旨を添削していただいた愛媛県立伊予高等学校教諭和田由起子氏、四国に生息するカモシカについて広く情報提供いただいた動物写真家の中西安男氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 秋山英一（1935）：改訂第四版石鎚連峯と面河溪。いはつち文庫出版部。pp.29-30.
- 別子山村史編纂委員会（1981）：第11編地名と伝説。別子山村史。別子山村史編纂委員会。第一法規出版株式会社。p.917.
- 愛媛県土木部都市計画課（1952）：5. 家畜及び動物 野生動物。石鎚連峰と面河溪調査書。愛媛県土木部都市計画課。愛媛県。p.22.
- 愛媛県教育委員会（1964）：にっぽんかわうそ天然記念物愛媛県獣。愛媛県教育委員会。57pp.
- 愛媛県教育委員会（2016）：八木繁一。愛媛人物博物館～人物博物館展示の愛媛の偉人たち～。愛媛県教育委員会。愛媛県生涯学習センター。p.27.
- 愛媛県新居郡役所（1923）：第三編生物。愛媛県新居郡誌。三秀舎。pp.28-29.
- 愛媛県師範学校郷土館（1934）：（8）剥製及び液浸標本。昭和9年6月郷土館目録。愛媛県師範学校郷土館。愛媛県師範学校郷土館。p.131.
- 花井正光（1995）：カモシカ。日本の天然記念物。加藤陸奥雄・沼田 眞・渡部景隆・畑 正憲。講談社。p.618.
- 伊藤玉男（1980）：第5章生物 三 幻のどうぶつたち。新居浜市史。新居浜市史編纂委員会。第一法規出版株式会社。p.319.
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会（1981）：角川日本地名大辞典 38 愛媛県。角川書店。1166pp.
- 環境省（2017）：環境省レッドリスト2017。入手先 環境省レッドリスト2017の公表について。http://www.env.go.jp/press/files/jp/105449.pdf,（参照2017-

- 4-23)
- 金城芳典（2012a）：四国山地のカモシカの生息状況。平成22・23年度四国山地カモシカ特別調査報告書。徳島県教育委員会・高知県教育委員会・（特）四国自然史科学研究センター。城東印刷社。pp.19-34.
- 金城芳典（2012b）：カモシカの死亡個体の分析。平成22・23年度四国山地カモシカ特別調査報告書。徳島県教育委員会・高知県教育委員会・（特）四国自然史科学研究センター。城東印刷社。pp.48-55.
- 金城芳典・山城明日香・山城 考（2012）：総合考察。平成22・23年度四国山地カモシカ特別調査報告書。徳島県教育委員会・高知県教育委員会・（特）四国自然史科学研究センター。城東印刷社。pp.95-99.
- 三浦慎悟（1994）：カモシカ。日本の哺乳類。阿部 永。東海大学出版会。pp.152-153.
- 宮本大右（2014）：愛媛県レッドデータブック2014 RED DATA BOOK EHIME - 愛媛県の絶滅のおそれのある野生動物 -。愛媛県。p.59.
- 森川国康（1975）：石鎚山系の動物。愛媛の自然。森川国康。愛媛文化双書刊行会。p.131.
- 森川国康（1979）：石鎚・面河の哺乳類。鳥類および爬虫類。日本自然保護協会調査報告第58号石鎚国定公園 石鎚山・面河地区自然環境保全調査報告書。財団法人日本自然保護協会。pp.87-88.
- 中西安男（1995）：カモシカに会った日ニホンカモシカ観察・高知県山中の記録。高知新聞社。164pp.
- 中西安男（1998）：四国産ニホンカモシカの生態と課題。高知大学黒潮圏研究所 所報 くろしお, No.13, pp.35-40.
- 中山鬼子太郎（1980）：第5章動物。面河村誌。面河村。株式会社ぎょうせい。p.43.
- 作道好男・作道克彦（1984）：愛媛大学教育学部百年史。教育文化出版教育科学研究所。882pp.
- 清水栄盛（1961）：愛媛の動物。株式会社松菊堂。235pp.
- 常田邦彦（1995）：カモシカはいま…。日本の天然記念物。加藤陸奥雄・沼田 眞・渡部景隆・畑 正憲。講談社。p.619.
- 八木繁一（1931）：哺乳綱。愛媛県動物誌。松山堂書店。p.145.
- 安森 滋（1996）：親子三代笹ヶ峰物語。徳島県教育印刷株式会社。337pp.



Carpicornis crispus Temminck かもしか

写真1 愛媛縣動物誌に掲載されていたカモシカの剥製（愛媛県立図書館蔵）



写真3 ニホンカモシカのラベル 表面



写真2 発見されたニホンカモシカの毛皮 スケールは60cm

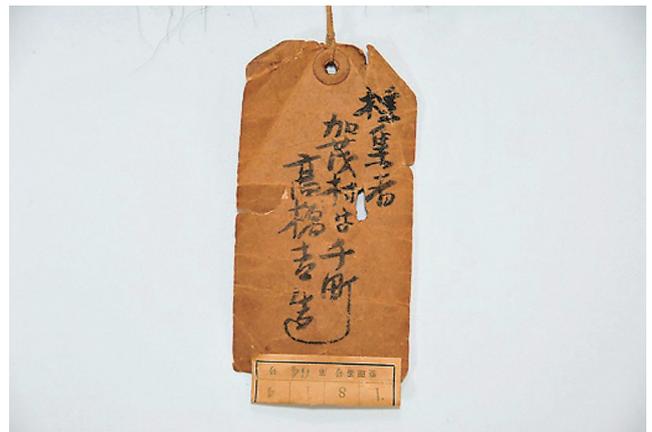


写真4 ニホンカモシカのラベル 裏面

